



田淵俊夫(「樹影」のためのデッサン)1971年 名古屋美術館蔵

田淵芸術の大きな特色として、抑制された装飾性があげられます。学生時代は装飾性とは無縁の作品でしたが、ナイジェリアから帰ってからの作品《ヨルバの花》では装飾性が一気に前面に押し出されてきます。日本では見られない原色の花が、中央に寄せられ、重ねられて、大きく描かれます。背景は、下半分がくすんだグレー、上方

は三角形の金と銀の幾何学模様になっています。金銀の造形は、滞在地ナイジェリア独特のものでしょうが、日本的でもあります。このきわめて装飾的な画面は、田淵芸術の中では異色の存在に見えますが、こうした装飾性は、のち、巧みに抑制されつつも、田淵芸術の根幹をなす性格となっていくものです。この装飾性が日本美術の大きな特色であることはいまでもありません。

田淵の作品のもう一つの大きな特色として、「時間性」、画家自身語るところによる「歴史性」を指摘することができます。その風景画は歴史性をもっていると指摘されていますし、自身も語っています。長久手で描いた風景は、実は天正12年(1584年)、羽柴秀吉(豊臣)陣営と織田信雄・徳川家康陣営の間でおこなわれた「小牧長久手の戦い」の場だったのです。その時代に刀や火縄銃を持った雑兵たちが走り回った土地であり、月を見ても、田淵は時代を隔てて秀吉が見ていたと感じたと語っています。名古屋の繁華街の夜に満月が浮かぶ

と相場が決まっています。日常的に原稿を書くという経験をお持ちでない方々は、この種のエッセーを笑いながら読み飛ばすと思いますが、同じような境遇に何度も陥った人間はそうもいきません。

以前この欄で「まったくカタログさえなければ展覧会の仕事もどれだけ楽か知れないと思うことが一再ならずあった」と書いたことがあります。カタログの苦勞とは、その大半はすなわち原稿の苦勞であり、名もない学芸員も締め切りに追まわられて脂汗を浮かべるといふ点では、人気作家と何ら変わるところはありません。カタログ作りを一度でも経験した学芸員で、胃が痛くなるような思いも、電話のベルの音に怯えたこともないなどという人物は恐らく皆無でしょう。私自身、もはやこれまで、と思ったことが一度や二度ではありません。山登りをしていると、一日の行程を振り返って、よくぞここまでたどり着いたものだと思ふにふけることがしばしばありますが、カタログ作りもどうしてあの難局を切り抜けたのかと、不思議にさえ思うことが時にあります。火事場の馬鹿力とはよく言ったもので、人間お尻に火がつくと思わぬ力を発揮するものですが、困ったことにそれを繰り返していると、火がつかないうちは一向に走り出さぬという悪習が身につけてしまっています。そしてさらに症状が悪化すると、今度は火がついても、それが全身に回らぬうちは大したことはないなどと、妙な自信を持ち始めます。全く人間の愚かさには限りがない、と思ひ知らされるのはこんな時です。(F)

の本格的な回顧展です。油彩画、イラストレーション、立体作品など約200点に、資料・文献を加えた約300点を時代順に展示する規模・内容ともに充実したものです。

この展覧会は名古屋美術館では7月21日に開幕しますが、それに先立って、4月1日まで東京都現代美術館で開催されています。先日1月19日に東京都現代美術館での開会式に出席してきましたので、そのときの模様を報告します。

展覧会の開会式というのは、美術館によってそれぞれ挙行の手順が違いますが、今回体

験した東京都現代美術館の開会式は面白いものでした。名古屋美術館の場合には、開会式のテープ・カットの後に、出席者は展覧会を鑑賞しますが、東京都現代美術館の場合には、出席者は先に展覧会を鑑賞して、式典の開始時間に会場の一室に集まって、美術館の挨拶、来賓の挨拶(今回は兵庫県立美術館館長で美術評論家の中原佑介氏でしたが、中村氏とは旧知の間柄で、昔話を交えた面白い内容でした)、そして最後に作家の挨拶(中村氏は初めての回顧展の開催に感慨深かったのか、とても短いけれども心のこもった謝辞で

作品がありますが、これも同様、月そのものを感じ入るのではなく、かつての人々と同じ月を見ていることに感銘しているのです。しかし、より重要なことは、草木画におけるそれにあるでしょう。同一画面に、白、黒、金、緑と描き分けられた四季のススキが同居させられた作品があります(《流転》1982年)。四季の姿に応じて色も変えられ、まるで虚と実の関係にも見えるススキは、実は時間の経過を表すものでしょうし、同時にその季節のススキの生命力を表しているように見えます。虚と実を、過去と現在に置き換えてみると、作家が草木画に織り込んでいる生と死の繰り返しや生命の連鎖というテーマにたどり着くでしょう。この、一画面に春夏秋冬を描き込む手法は、日本絵画では当たり前のおこなわれてきたものです。四季花鳥図、四季山水図の存在を指摘するだけで十分でしょう。

「僕の場合、絵を描く根本は感動なんです。」(アート・トップ叢書：同時代の画家集成『田淵俊夫』1993年 芸術新聞社)。このように語る田淵の「感動」は決して大げさなものではありません。何気ない景の中に、感動を見つけることがほとんどです。彼は春になって一斉に木々が芽吹く様子を見て感動します。それは単なる感傷ではなく、生命の連鎖の偉大さまでおよぶスケールの大きなものですが、良質の俳句の世界に通じるものでもあります。近世以前の日本絵画では、歌川広重が最も親しい特質を持った画家かもしれません。

このように、日本に伝統的であった美質を田淵芸術は備えているのです。もちろん、伝統的絵画とは異なった面もあります。田淵の場合デフォルメはほとんどおこなわず、あくまで写生を基礎にしたものであること。日本の伝統的絵画では、輪郭線は色面を区画する

感想ノートから

藤本由紀夫展—ここ、そして、そこ
2006年9月16日～11月5日

「バナラビーンズのおいを感じしたのは、やはり私の気のせいなのでしょうか。」

藤本由紀夫の作品は想像力をくすぐり、自身を拡張させる体験を私たちにもたらしめます。封したガラス瓶の、バナラビーンズが薫る余白を、彫刻として示した作品からの感想です。バナラの香りは、展示室をも彫刻としたことでしょうか。

「予想外です。作品を初めて見、聴きました。作品を見て、考え、目を閉じて、さらに多くの事を感じました。発想、考え、すばらしいです。良い時間をありがとう。」

「『やられたっ!』っていう感じ。うん、よかったヨ。」

「不思議だ。この展覧会、おもしろい!」

「理屈ではなく、感覚で心地良かったです。」

藤本の作品は、日常の営みに気づかれた、いたってシンプルなものですが、虚をつく、例のないものです。

「3回目ですが、よく分かりません。」

これは、70才の女性から。対して、

「でもよく3回来館されましたね。」

「70才の方も、3回来られる行動力がすばらしいです。理解するとかなんとかでなく、その方にとって何か得るものがあるといいです

働きを持つものですが、中年期以降の田淵作品では、輪郭線をはみ出して色が施されること。さらに品良く仕上げられた画面に込められた、大げさではないメッセージを読み取ることもできます。自然を描き続けるのは、その自然が現代人によって壊されていくことへの彼なりの訴えでしょうし、また、草花を凝視してその生命を描き続けるのは、生命の連鎖の偉大さや、命の大切さを訴えることにもつながることでしょう。などなど、伝統的でありながら、かつ新しさを加えたところに田淵作品は位置しているのです。

日本画の新生面を開いた画家のひとりに横山操(1920—1973)がいます。川端龍子の青龍社に属した横山は、日本画がそれまで取り上げることのなかった炭坑や工場、あるいは都市の近代的な光景を、圧倒的な大きな画面に大胆に描きました。これだけでも、日本画の新生面を開いたといえるのですが、青龍社脱退後に描きはじめた水墨画は、表面上はより日本画的でありながら、従来にはなかった新水墨画と評価できるものです。《越路十景》(瀟湘八景)などがそれにあたります。横山の「黒」は実は墨だけではなく、顔料を焼いたものも使っていたようですが、黒と白の鮮烈な画面はきわめて印象的です。「墨」は、穏やかさから強さまで、さまざまな表現に対応してきましたが、筆を操る画家の能力によって新たな表現がなお可能になることを横山は示してくれています。

ことほどさように、日本画はまだだ発展する可能性を秘めているとわたしは期待しています。ただ明治以後使ってきた「日本画」に変わる何か別の名称があるといいとも思っています。日本人の心の琴線に触れる作品を総称する何か。(hbk)



撮影：高嶋清俊

ね。」

同感です。よく分からなくても3回来てくださった訳。とても気になります。「藤本作品の魔力」、でしょうか。

「この美術館での展示(自然光が入り、音が響く大きな箱)すごく良い適した場に思いました。この展示室(美術館)の中で場として魅力的な1F～2Fへの階段、ここでデュシャンと出会えるとは!! 隠されたりズムへの驚きとデュシャンの声を初めて耳にする嬉しさ、この魅力的な場がまた新たな印象で記憶に残りそうです。

作品に添えられた文章も程良く導いてくれ楽しく読みました。2Fの展示室、こんなに美術館の展示室をゴキブリのようにかべに添って歩いたのは初めてです。ゆっくりゆっくり移動しながら聴こえてくる”音”は本当に美しかった。」

展覧会はコミュニケーションのツールです。そこには作家と美術館の思いがあります。投げかけにエコーのように応えてくださるありがたいさ。

冷静に自分を見つめる、溺れることのないナルシスが、私をかすめて行きました。(み。)

した)を聴くというものでした。

私が驚いたのは、それに引き続いて、中村宏展と同時に開催される「MOTアニュアル 等身大の約束」展の開会式がロビーで行われ、その後合同でのレセプションになったことでした。やはり東京ということもあって、ふたつの展覧会の開会式の出席者のなかには、日本を代表する美術家や評論家だけでなく、MOTアニュアルの出品作家をはじめとした若い美術家やデザイナー、美術館学芸員、そして芸能人(若手の美術家と結婚した女優)などの姿も見られて、とても賑やかなものでした。(sy)

展覧会の舞台裏

カタログ 6

雑誌を読んでいると、どの雑誌にもたいてい作家のエッセーが載っています。著名な作家、人気作家が、身の雑事を見開き2ページ程度の長さにとどめて、面白おかしく読ませるといふあれです。扱うテーマは作家によって様々ですが、どんな作家のエッセーにも一度は必ず登場するという、いわば定番のテーマというやつがあります。エッセーとは基本的に身の雑事を扱うものですが、作家にとって最も身近なその定番のテーマといえ、それは原稿を書くことです。もちろん書くといっても、素晴らしいアイデアが次々と湧いて、あっという間に原稿ができあがり、夕暮れに染まる書斎で揺り椅子に身を沈め、モーツァルトを聴きながら芳醇なワインを楽しんでいた、というような話ではなく、締め切りはとうの昔に過ぎていたのにまだ一文字も書いておらず、編集部から届く矢の催促を右へ左へとかわしながら、真っさらな原稿用紙(パソコンのモニター)の前で、苦吟しながらペンを動かす(キーボードを叩く)という、あれです。人の不幸は蜜の味、ではありませんが、読者を楽しませようとするサービス精神のなせる技か、あるいは本当に筆が遅いのか、この手のエッセーは作家と編集者との丁々発止の駆け引きと、入稿までの綱渡りのようなやりとり、というあたりが読みどころ

展覧会 現在進行形

中村宏・図画事件1953—2007展
東京都現代美術館での開会式に出席して

中村宏・図画事件1953—2007展は、1950年代から現在まで、現代美術の流行に惑わされることなく、一貫して独自の「図画」を探究してきた「事件」画家・中村宏(1932～)の半世紀を越える創作活動の全貌を紹介する初めて

どこがおもしろい?!

今回はフリーデンスライヒ・フンデルトワッサー(1928-2000)の《(637) 郷愁の紫色の屋根Ⅱ》(1982年)をご覧になった皆さんの感想を紹介します。

「ぐるぐるぐるぐる…見てると体がゆれてきます!赤がまぶしい。」(M.Tさん、19歳)

「みどりで きみどりで まどがいっぱいあって こげちゃがあって ちゃいろでからふるな かーてんと えんとつと からふるなまど。もし こんなからふるないえがあったら すみたいなー あと きれいなおつきさま〇」(A.Kさん、7歳)

「目を近づけると、上空から撮った写真のようにも見えます。緑のラインは宇宙人の血管にも見えます。未知の生物にシンシヨクされているかぶと虫。かえるのたまごを葉っぱの上に並べた造形遊び。いろいろな具をきゅうりやのりで四角く巻いた、具だけの巻き寿司。」(H.Rさん、53歳)

「縦縞のカーテンの前に置かれたX'masツリーに見えます。四角の窓のようなオーナメントは、実はプレゼントが入った小箱。中に入っている物を想像するとワクワクしてきます。」(A.Kさん、37歳)

「描かれている、緑色でまどがたくさんある建物の側面は、よく見ていると緑色がぐるぐるして、複雑に作られた地形を上から見ているようにも見えてくる。地形として見出すと、真ん中の赤いのが血の池のようにも見え、黒い窓は恐ろしい落とし穴のようだ。そ

うなるとなんだか怖い…そう思ってまた見直すと今度はただの建物の緑色の側面だ。この人は大阪のかわったごみ処理場を作った人でしょうか…」(M.Eさん、44歳)

遠近法を用いて描かれた絵画に慣れた目には、この作品に描かれている建物の構造は捉えにくく、屋根の部分が背景のように見えてしまうのも無理はありません。クリスマスを連想された方は、作品の展示時期(9~12月)を意識したのでしょうか。

オーストリアのウィーンで生まれたフンデルトワッサーは、その独特な色使いと曲線や渦巻きを多用した絵画作品で知られる芸術家です。自分の外側において自分を取り巻いているものを五つの“皮膚”にたとえ、それぞれについての深い考察と創作への応用を繰り返しました。1961年に東京で初個展を開いて以来、日本との関わりは深く、名古屋市美術館でも1999年に展覧会を開催しています。ご指摘にある大阪市・舞洲にあるゴミ焼却施設や下水汚泥集中処理センターは、そのデザインに彼独自の思想が強く表れています。

「全てを飲み込むミトコンドリアの親分。原



フンデルトワッサー《(637) 郷愁の紫色の屋根Ⅱ》、混合技法、1982年
Copyright is: Hundertwasser Archive, Vienna

始生物と家の融合に見える。つまり、「始まり」と「終わり」(終着点)のように感じた。大小さまざまな色とりどりの窓は、人種の境、世界地図を広げたようだ。右半分が上部の線も含め、細々としている点も面白い。この家のエントツからサンタは入れるのだろうか?」(shitoさん、19歳)

「まどの形が香水のびんの形に見えた。ひとつひとつのまどは小さいコミュニティーのようで、お互いのお互いが混ざり合ってひとつの大きな家をつくっている。そんなふうにみえました。」(N.Yさん、29歳)

窓があることで、建物の内と外を行き来できるものは数え切れません。フンデルトワッサーは「建築は窓から作られなければならない、窓は内の世界と外の世界をつなぐ架け橋である」との言葉を残しています。

「砂に指で描いたみたい。ぐるぐるぐるぐる指を動かしたらできちゃったみたいに見える。人工的じゃなくて、自然の一部としての活動の結果みたい。」(匿名、?歳)

「家がどんどん溶けていくみたい。なんか怖い。」(Taishiさん、12歳)

「緑の部分を見ているとグーンってなりません。“郷愁の”って書いてありますが、何かもつとごちゃごちゃした“混乱”みたいなものを感じます。」(Aさん、18歳)

「この家は、血液が流れているようで、人と自然と同じように、息をしているような感じがします。窓が人の体の内臓にも見えます。とても面白い絵だと思いました。」(H.Iさん、24歳)

作家が人間の三番目の皮膚と定義した、住まい。人間を風雨から守るための建物としてだけでなく、そこに暮らす人々の体温やさまざまな感情などが交差する空間として、またそれ自体がひとつの生命体・運動体として存在していることを、この作品は気づかせようとしているのかもしれない。今回もたくさんのご意見をお寄せいただき、ありがとうございました。(3)

常設展だより

平成19年度の常設展について

昨年度常設展の展示方法を大きく変更したことは、一年前のこのアートペーパーの紙上でご案内をしました。いつもの馴染みの作品に出会える場所でもある常設展示室は、同時に新たな作品との出会いの場所でもあるべきでは、との思いから、コレクションの中でもこれまで紹介されることの少なかった作品や、作家をできるだけまとめて展示する機会を昨年度は設けるように努力いたしました。たとえば9月から11月にかけて紹介した田淵俊夫の素描の特集展示は、現在の日本画壇を

代表するこの作家の力量を余すところなく感じていただける、またとない機会となったと思います。完成作ではなく、素描であったために、作家の技量はよりストレートに観るものに伝わり、この展示で日本画の持つ魅力をあらためて感じたという方も少なくなかったと思います。あるいは年度末にご紹介した、メキシコと満州に取材した写真の比較展示も大変興味深いものがあつたのではないかと思います。アメリカと中国という大国の隣に位置し、その影響を常に受けながら独自の文化を発展させてきたこの二つの地域を撮影した写真には、異邦人としての作家の視点が色濃く映し出されており、逆にその地域の特徴が鮮明に浮かび上がっていたのではないかと思います。さらに「巴里憧憬展」にあわせて常設企画展の一つとして開催した「フランスに学

んだ画家たち」も、当館のコレクションの中だけでもフランスに憧れ、その地を踏んだ作家がこれほど存在したのかと、あらためて日本人にとってパリという都市が持っていた意味の重さを認識させられる展示となりました。平成19年度の常設展は、前年度の方針を踏襲し、明確なテーマを設けながらコレクションの新たな魅力の発掘を目指したいと考えています。常設展=いつも同じ展示=いつでも行ける=あわてて行く必要はない、という皆さんの常識を打ち破り、今回だけのテーマ=期間限定の展示=見逃すと次はない=すぐに美術館へ! という新しい流れを作り出したいと思います。久しぶりの展示、初めての展示といった、新鮮な作品の紹介ももちろんですが、いつも見慣れたあの作品が、見せ方次第でこんなに変わる、という意外性、驚きこ

そが展示担当者の腕の見せ所となります。要は作品に潜む魅力を、展示によってどれだけ引き出せるかということなのですが、19年度ではたとえば常設展示室の2で、「静物」や「自画像」といった同じテーマによる作品を特集して紹介することにより、個々の作家の表現の違いをより鮮明に浮かび上がらせる、という企画があります。あるいは常設展示室3で、特別展のダリ展にあわせて、コレクションの中のシュール的な傾向の作品を、絵画と写真の2部構成でまとめて展示するという企画もあります。美術館活動の中核はコレクションであり、そのコレクションの魅力を味わい尽くすことこそが鑑賞の醍醐味といえるでしょう。皆さんにその醍醐味を存分に味わっていただけるよう、平成19年度も様々な工夫を凝らしていきます。どうぞ、お楽しみに。(F)

郷土の作家たち

米倉壽仁(よねくらひさひと/1905-1994)

1905年、山梨県甲府市の日本陣甲陽館の次男として生まれる。1922年、甲府中学校を卒業後、翌1923年、名古屋高等商業学校(現名古屋大学、経済学部、法学部の前身)に入学。在学中に、ヨーロッパ留学から帰国したばかりの村山知義が出版した『意識的構成派』を読み、美術に強い関心を抱く。タトリンやリシツキーなど、ロシア構成主義を中心に据え、芸術のさらなる自由を訴える村山の本に「目が洗われ」、「全身が震え出すような感動」を覚えた米倉は、以後美術の道を歩むことを決意する。1928年、伯母が経営する伊藤学園甲府女子高等商業学校および甲府湯田高等女学校で教職に就く(1936年まで)。1930年、甲府市にて美術集団「六人社」(後に「皓人会」と改名)を結成し、甲府商工会議所で第一回展を開催。1935年、独立美術協会展に初入選。以後同展を中心に作品を発表する。1936年、教職を辞して上京し、絵画制作に専念する。すでにこの頃の作品にはダリを中心とするシュルレアリスムの影響が顕著に表れているが、戦争への予感を孕んだ『ヨーロッパの危機』(1936年)に見られるように、個人の内面

だけでなく、社会全般への問題意識が常に感じられる点が米倉の作品の特徴となっている。1939年、福沢一郎を中心に結成された美術文化協会の創立に参加し会員となり、以後1951年に脱会するまで同会を中心に活動を展開する。同会のメンバーの多くは米倉をはじめ、シュルレアリスムをその作風の基礎に据えていたが、結成の主旨はイズムのいかに問わず芸術の総合を目指すというものであった。1952年、「流行をいたずらに追わず、陳腐とアカデミズムをきらい、常に新しさを要求する」美術家集団サロン・ド・ジュワンを結成。以後晩年まで同会を中心に作品を発表した。シュルレアリスムを「自我を超える否定の精神」と捉えた米倉は、没するまでその精神の在り方を守り続けた。(F)



米倉壽仁(山を想ふ)1952年

山本悍右(やまもとかんすけ/1914-1987)

1930年代後半、画学生や若き芸術家たちの間で巻き起こった超現実主義への接近の背景には、全体主義へと向かう時代の中で、個人の夢想と抒情性を表現するシュルレアリスムの機能への期待があった。そして、それだからこそ、シュルレアリスム本来が目指した感性の解放は展開されることなく、ある“スタイル”として流行したのも事実である。

山本勘助(1936年に悍右とする)は、戦前・戦後を通じ、名古屋に居ながら、一貫してシュルレアリスムの詩的実験を展開し得た、稀有な詩人であり、写真家でもある。

悍右の父・山本五郎は、(愛友写真倶楽部)の創立同人でもあり、彼が経営していた名古屋栄町の写真機械材料店は、名古屋に於ける写真の推進拠点でもあった。1931年、悍右はそこで結成された(独立写真研究会)に参加し、本格的に写真を始める。この時期、フォト・コラージュによる完成度の高い、極めて批評的な作品を発表するも、17歳のその存在と才能が広く知られることはなかった。

名古屋の“前衛”がその台頭を見せるのは、1937(昭和12)年7月、名古屋丸善画廊での「海外超現実主義作品展」開催を契機とする。会場に日参していた悍右は、そこで山中散生を知り、その出会いが翌1938(昭和13)年にシュルレアリスム詩誌『夜の噴水』の発行へとつなが

る。また、1939(昭和14)年2月には(ナゴヤ・フォトアヴァンガード)の結成に参加する一方で、北園克衛らの詩人グループ(VOUクラブ)に参加する等、悍右の活動は、当時シュルレアリスム運動の“磁場”と目されつつあった名古屋そのものを象徴するものでもあった。

名古屋の“フォト・アヴァンギャルド(前衛写真)”の特質は、超現実主義と抽象美術との「ハイブリット」な形で展開した坂田稔と、詩的映像として表現した山本悍右の両極で展開したところにある。自然の形態を接写した“オブジェ写真”により「写真のオートマチズム(自動筆記)」を主張した坂田に対して、悍右は偶然性を排し、モチーフに意味を読み込んだレディ・メイドを組み合わせたオブジェとイメージによる構成を撮影した。

だが、同年末、(ナゴヤ・フォトアヴァンガード)が時代の荒波の中で、分裂解散すると、その後悍右は(VOUクラブ)の同人として終生シュルレアリスムを標榜した独自で孤高の表現を展開して行くことになる。(J.T.)

No Image

展評

2007年3月10日(土)～3月21日(水)
松坂屋美術館

2007両洋の眼(名古屋展)

「日本絵画において『日本画』『洋画』をひとつの眼差しでみる展覧会」という企画であり、今回で18回目。第一線を行く実力のある画家の最新の意欲作、実験作を紹介すべく、数人の委員それぞれが推薦した作家の作品74点が出品されています。

油絵でありながら、日本画に見える作品もあり、その逆もあります。具象あり、抽象あり、流派・会派もさまざまです。カタログには作品が作家名の五十音順に掲載されています。図版キャプションも「麻紙・岩絵具・墨・金箔」「パネル・アクリル絵具」「絹布・岩絵具・墨・金」「キャンバス・油絵具」と、日本画洋画の別を特に意識しないようにされています。

創立時には、日本画と洋画を区別しないで見るということは、とても新鮮な発想でした。今日では、そうしたことは、当たり前のようになっており、所期の目的の一つは達成

されてきているといえるでしょう。実力作家の最新作に親しむことのできる機会であり、鑑賞者の質の底上げの為というその狙いも、納得できるところです。

しかし、今日、日本の絵画は「飾る」という使命から離れていぶん経過しています。会場では、この作家は何を表現しているのだろうか、という思いが私の脳裏から離れることがありませんでした。色と形の純粋に美しいハーモニーを見せる作品もあれば、内省的な作品、作家の感興にもとづく作品と、それぞれに楽しめましたが、「今」を表現する作品がもっとあってほしいと思うのは私だけではないでしょう。

米倉委員の言うように、「両洋」の「両」には多くの意味が認められます。より広い「両」の紹介によって、いっそう刺激的な展覧会になると期待したいものです。若い世代の刺激的な作品などもあるでしょうし。図録で、委員の一人が「一時流行した”社会主義リアリズム”とは一線を画したヒューマニズム絵画が、そろそろ新しい感受性を伴って生まれてきても良さそうだが…。」(藤慶之)が記しているのが気にかかります。(hkh)

CULTURE, MOVIE, DRAMA, MUSIC & BOOK

鷺田清一著

『「聴く」ことのカ—臨床哲学試論』

「話がつじないとき、ふつう内容をもっと細かく、ていねいに話そうとする。が、皮肉なことに、内容が細かくなればなるほどところが離れているようにおもわれてくる。」「ことばが途切れたとき、そしてどちらからもとっさにその不在を埋めることばがでてこないときの気まずい沈黙(…)ひとはこういう空虚に耐えられず、どうにかしてことばを紡ぎだそうとする。だれが話しているのかじぶんでもよくわからないようなことばが、次から次へと虚空に向かって打ち放たれる。」

もっとうまく話せたらいいのに、と思う気持ちとはうらはらに、相手のことばを「聴く力」や「待つ力」が本当は求められている、という場面は意外と多いのかもしれない。そんなことを考えさせられるのが本書『「聴く」ことのカ』です。「相手がどう思おうと、言わばなし、という場合が多いのは、からだ(他人)にむかって劈いていないのだ。」(竹内敏晴『ことばが劈かれるとき』)この引用文は、妙に的をえている気がします。

病院や介護の現場などで「傾聴スキル」がときどき話題になります。美術館でもまた、美術鑑賞にきた子どもたちが思い思いにしゃべる感想をどのようにうけとめるか、ということに関して、学芸員の質が問われる場面があります。しかしながら、聴く力がもっと必要になるのは、絵から何かを感じているけれども、それが何かわからない、それを言い当てることばがみつからない子どもに何かしゃべってもらって、心の動きに気づいてもらいたいときだったりします。

一般的に言えば、聴く力とは、なんらかの困難のために、よりよく自分のことを語れな

い人々にことばをこぼしてもらおうための力でもあり、聞こえてきたことばからその人の内情を理解するための力だと思いますが、そうすると、聴くことはかなりむずかしいのだと改めて思います。よく聴くためには、相手をうらまず、なおかつ自分もくさらない忍耐や寛容が必要になってきます。受動的な行為であるために、ふだんは「話すこと」よりも簡単に思われる「聴くこと」ですが、このように考えると人格にかかわってきそうしようもない気になります。

本書は、「聴く」ことのカについて論じているので、単なる聴く力についての分析以上に豊かな内容が含まれています。「そのつどの現実の会話において、その『だれか』がだれであるかは、それぞれの『だれか』にとって決定的な意味をもつといつてよい。」美術鑑賞はよく比喩的に「作品とのダイアログ(対話)」と言われますが、聴くことでひとはだれかの前に立つ存在として特定の意味をあたえられる、という示唆は、私たちがなぜ(だれかの)美術に魅かれてしまうのか、という疑問にも答える可能性があるように思えます。

本書は刊行からしばらく経っていますが、続編にあたる『「待つ」ということ』(角川選書)が昨年刊行されましたので、今回紹介させていただきます。(nori)



鷺田清一「聴く」ことのカ—臨床哲学試論 (1999年、阪急コミュニケーションズ)

が生で聴く機会の少ない筆策(ひちりき)の独特な音色の魅力に引き込まれ、東儀さんのオリジナル曲をはじめ、ジャズの名曲(枯葉)をアレンジした楽曲などの演奏に聞き入っていました。曲間には、サンクトペテルブルグの街の印象やエルミタージュ美術館内での演奏エピソードについてお話しいただいたのですが、その後も雅楽の紹介から昨今の日本語の乱れ、教育問題、日本人が日本文化を理解することの大切さについてなど話題が尽きることはなく、さらには、なかなか鳴りやまない拍手に予定時間を超過してジョン・レノンの《イマジン》の弾き語り(熱唱!)で応えるなど、サービス精神旺盛な一面も見せていただきました。最後の《ふるさと》では、目を閉じて音の響きに耳を傾ける来館者の姿が印象的でした。今後も展覧会活動と並行して、さまざまな形で美術館を楽しんでいただけるよう努めていきます。寒い中ご来場いただき、ありがとうございました。(3)

展評

2007年2月10日(土)～3月25日(日)
岡崎市美術館

「森」としての絵画:「絵」のなかで考える

岡崎市美術館は森の中にあります。「美術館前」というバス停で降りるとあたりは霧に煙っていて、ほんのりと森の香りがしていました。森の中にある美術館で開催された“森としての絵画”と題された展覧会。そこには、本当に豊かな森が出現していました。19人の画家たちの描き出す作品にはそれぞれの心情に基づいた現代が映し出されるのですが、そこには現代を肯定的に捉える姿があるような気がします。

展示は「システムとしての絵画」、「ドローイングから紡ぐ」、「イメージの湧出力」、「影像的」、「器としての絵画」、「絵を立ち上げる」の六つのセクションに分かれています。その中で最も気になったのが、「影像的」と題されたセクションです。岩熊力也の作品は、非常に印象的でした。薄いポリエステルに描かれた不思議な模様。それは、夢の中を漂うかのようであり、そして何よりも、軽い。なぜかその軽さに惹きつけられてしまいました。そして同じセクションのもう1人の作家、横内賢太郎の作品もまた、サテンに描き出された、軽く現実の重みを感じさせないものでした。オークションカタログの写真を元に描い

た絵柄ははっきりとした像を結ばず、やはり、起きたらすぐに忘れ去ってどこかへ消えてゆく夢に似ています。現代の絵画を「コンピューターのウィンドウのような薄い平面がいくつも重なったレイヤーとしての姿」と主催者は喩えているのですが、液晶の薄い平面に映し出される、現実の重みを伴わない情報の流れの中にある現代という時代を、二人の作品はその中に取り込んでしまったのではないかと。そんな感じも受けます。

現代に対する問いかけのひとつに、目に見えない情報が奔流となって流れることにより、失われるものは何か、そして肯定的に捉えるべきものは何かということがあると思います。この展覧会を通じてそんなことも少し考えさせられました。(akko)



会場風景

イベントガイド

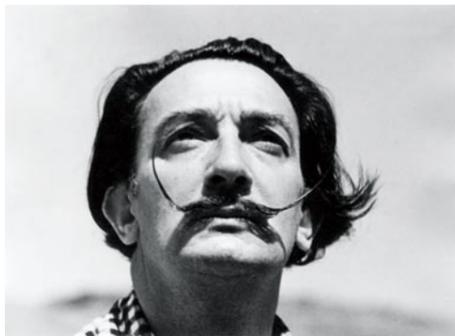
■特別展「生誕100年記念 ダリ展 創造する多面体」

5/12(土)～7/11(水)

夢と現実が白昼夢のように融合した独特の世界で、多くの人々を魅了し続けてきた、20世紀を代表する画家サルバドール・ダリ(1904-1989)。「ダリ生誕100年記念」プロジェクトの一環として、スペインのガラ=サルバドール・ダリ財団およびアメリカのサルバドール・ダリ美術館の全面的な協力のもと、182点の作品を展示して、ダリの多面的な世界をご紹介します。

○作品解説会 6/3(日)、7/1(日) 14:00-
講師:深谷克典(当館学芸係長) 無料・先着180名

○映画上映会「白い恐怖」 5/20(日)、6/2(土)・9(土)



ダリのポートレイト
Image rights of Salvador Dalí reserved. Fundació Gala-Salvador Dalí, Figueres, Spain, 2007

◆美術館の「キッズの日」

休みの日は、美術館へあそびにきませんか? 美術の楽しさを発見することも向け講座です。

○アート・ウォッチング
6/24(日)10:00-12:00

家族や友達といっしょに美術館にある絵や彫刻を見てまわるプログラムです。絵を見てクイズやゲームをしたり、彫刻をまねて作ったり、ちょっとした遊びをしながら楽しくすごしましょう。

対象:子ども(小中学生)とおとな(保護者)とのグループ 参加費:子ども(小中学生)100

【編集後記】

アートペーパーの最初のページに掲載されるコラムを、6年間24回にわたって馬場駿吉さんにご執筆いただきました。「現代美術への接近法」と題して、馬場さん自身の現代美術との関わりという大変豊かな体験に根ざした文章をお寄せいただいたのですが、前回で終了ということになりました。この場を借りて、馬場さんに心からお礼を申し上げます。そして、今回からは、彫刻家で名古屋美術館参加の石黒謙二が執筆を担当することになりました。「アートの旅」過去・現在・未来」という題で、作家の視点から見た美術について、また、これまで歩んできた中でのエピソードなど、美術に関わる様々な事柄についての内容となるものと思います。どうぞ期待ください。新たな執筆者を迎え、学芸スタッフもまた新たな気持ちで原稿執筆に取り組みたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。(akko)

アートペーパー第73号 発行日:2007年4月1日
発行 名古屋市美術館 [白川公園内]
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番 25号
地下鉄(伏見駅・大須観音駅)下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休館日:毎週月曜(祝日の場合は翌日)
Nagoya City Art Museum

14:00-

本編中、夢の場面の装置をダリが担当
監督:アルフレッド・ヒッチコック 111分
英語(日本語字幕つき) 無料・先着180名

■コレクション解析学2007-2008

名古屋市美術館所蔵の美術作品の中から、特定の作品を詳しく紹介する講座です。当館の学芸員が講師をつとめ、最新の研究結果もあわせてお話しします。

第1回 5/27(日) 14:00-15:30

田淵俊夫《ヨルバの花》(1968年)について
演題:「アフリカの地で得たもの」
講師:神谷浩(当館学芸課長) 申込不要・無料・先着180名

第2回 7/29(日) 14:00-15:30

ティナ・モドッティ《アステカの赤子》(1926-27年頃)について
演題:「愛に、芸術に、そして革命に生きた女性写真家のまなざし」
講師:笠木日南子(当館学芸員) 申込不要・無料・先着180名

■フライデー・ナイト・シアター

6/8(金) 18:00-

毎月第二金曜日の夜間開館時に開催。アートに関する貴重なフィルムを上映します。作品は決定次第ホームページでご案内します。無料・先着180名

*名古屋市美術館は、7/12(木)～7/20(金)の期間、休館いたします。

円 おとな(高校生以上)400円 定員:各回10組 申込〆切:5/31(木)

★申し込み方法

官製はがきに①住所、②参加者全員の氏名(ふりがな)、③子どもの学年(さしつかえなければ年齢も)、④電話番号、⑤希望のプログラム名と日時を記入し、名古屋市美術館「キッズの日」係までお申し込みください。はがき1枚で1プログラム1グループの申し込みとさせていただきます。申し込みが多いときは抽選し、当選の方にはプログラム実施日の10日前までに参加証をお送りします。詳しくはホームページをご覧ください。

イベントレビュー

大エルミタージュ美術館展記念 東儀秀樹トーク&ミニコンサート

世界有数のコレクションとともに専属のオーケストラを有するエルミタージュ美術館。2007年の幕開けとともに始まる大規模な展覧会にあわせ、音楽に親しむ機会も提供したいと考えていたところ、ふとしたことから雅楽師の東儀秀樹さんとエルミタージュ美術館との接点を知り、協力をお願いしました。ご本人も美術に大変興味があるとのことでご快諾いただき、コンサート開催の運びとなりました。

1月19日(金)の夕方、美術館の地階ロビーはそれまで味わったことのない空気に包まれました。事前に申し込んだ椅子席整理券で参加された方、立ち見を承知で駆けつけた方、展覧会を訪れて初めてコンサートを知った方、それぞれ